

編修趣意書

(教育基本法との対照表)

※受理番号	学校	教科	種目	学年	
106-74	高等学校	理科	生物基礎		
※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	教科書名			
104 数研	生基 104-901	改訂版 生物基礎			

1. 編修の基本方針

以下の点を編修の基本方針として、教育基本法第2条に示された教育の目標を達成できるように配慮しました。

- ① 生徒自らが、目的意識や見通しをもちながら、主体的・自律的に学習に取り組めるよう配慮した。学習内容を正確に理解できるよう、基本的な事項を簡潔に扱うとともに、段階を追って幅広い知識を身につけられるような構成とした。
- ② 生物学が日常生活や社会と深く結びついていることを実感できるよう努めた。また、学習内容が、ヒトのからだや人間活動とどのように関連しているのかがわかるように配慮し、かつ学習者の生きる力を育成する内容豊かなものを中心に選定した。
- ③ 生徒が探究の過程を通して学習できるよう配慮した。問い合わせや投げかけを入れることにより、生徒自身が教科書を読みながら、理科の見方・考え方をはたらかせられるような構成とした。
- ④ 実験・観察・調査・実習などの活動を通して、生徒どうしがコミュニケーションをはかり、対話的に学習を進められる内容となるよう留意した。

2. 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
生物基礎を学ぶにあたって 探究のプロセス	DNA から身のまわりの環境に関するここまで考えることで、幅広い知識と真理を求める態度が重要であることがわかるよう配慮しました（第1号）。	p.8~9
	「探究のプロセス」を設け、自分で考え、調べ、研究していく態度や能力を身につけられるようにしました（第1号、第2号）。	p.10~15
第1章 生物の特徴	多様な環境に生息する多様な哺乳類を取り上げるにあたっては、世界各地の環境と哺乳類を扱うことで、世界に向けて視野を広くもって学習に取り組めるようにしました（第1号）。	p.28~29
	観察の材料として、自分の口腔上皮やヨーグルトなどの食品など、身边にあるものを取り上げることで、学習内容が生活と深く結びついていることを実感できるようにしました（第2号）。	p.35 p.40

	日本人研究者である大村智氏の功績を取り上げることで、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する心を養えるよう配慮しました（第5号）。	p.40
	生命活動にエネルギーが必要であることを学習する箇所では、高校生の日常生活を想定した取り上げ方をすることで、学習内容を自分事としてとらえ、主体的に学べるよう配慮しました（第1号）。	p.44～47
第2章 遺伝子とそれはたらき	DNA模型を作製する実習においては、個人の成果をクラス全体で共有するような誘導文を設けて、互いに協力し合う態度を養えるよう配慮しました（第3号）。	p.73
	遺伝情報の発現に関して、過去の研究者が行った実験を紹介したり、それらをもとに考えさせるような問い合わせたりすることで、さまざまな研究者による研究の積み重ねによって、現在の社会があることを実感できるようにしました（第3号）。	p.74～77 p.81 p.96
	ゲノムに関する最近の話題を複数紹介することで、幅広い教養を身につけるとともに、学習内容が社会と密接に関連したものであることを実感できるようにしました（第1号、第2号）。	p.108～109
第3章 ヒトの体内環境の維持	健康や病気に関する事例を取り上げ、健康なからだを保持することに向き合う精神を養えるよう配慮するとともに、学習内容が生活に密接に関連したものであることを実感できるようにしました（第2号）。	p.121 p.123 p.132 p.137 p.154～157
	日本人研究者である北里柴三郎氏や本庶佑氏、坂口志文氏の功績を取り上げることで、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する心を養えるよう配慮しました（第5号）。	p.156～157
第4章 生物の多様性と生態系	各バイオームに見られる植物・動物を多くの写真で紹介することで、豊かな自然を実感するとともにそれを大切にする心を育めるよう配慮しました（第4号）。	p.184～191
	生態系の保全の重要性を示すとともに、干潟や里山など、身のまわりで見られる保全活動や人間社会のあり方について取り上げ、環境の保全に寄与する態度を養えるようにしました（第3号、第4号）。	p.217～221
	生態系の保全について、国際的な取り組みの例として「生物多様性条約」や「ラムサール条約」、「SDGs」などを取り上げることで、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養えるようにしました（第5号）。	p.217～221
Zoom探究	自分で考え、調べ、研究していく態度や能力を身につけられるよう、探究のテーマの見つけ方やグラフの作成・読み取りのしかたを詳しく取り上げるとともに、探究の実践例を紹介しました（第1号）。	p.224～233

生物図鑑	教科書に登場する生物を多くの写真をまじえて紹介することで、生命を尊び、自然を大切にする態度を養えるようにしました（第4号）。	p.249～265
	日本の絶滅危惧種を取り上げることで、自然を大切にし、守ろうとする心を育めるよう配慮しました（第4号）。	p.266

3. 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

学校教育法第51条に示された高等学校教育の目標を達成できるよう、以下のような点に配慮しました。

- 各章のはじめに「中学校で学習したこと」を設け、内容を簡潔にまとめました。生徒がこれまでに身につけてきた知識を活かして「生物基礎」の学習を進められるよう配慮しました（学校教育法 第51条 第1号）。

〔該当箇所〕 p. 26, 66, 112, 162
- 前見返しでは、各章での学習内容の関連を示すとともに、生態系から細胞・分子まで、マクロな視点からミクロな視点までのつながりを示すことで、学習内容を体系的に身につけられるようにしました。さらに、後見返しでは「生物基礎」の後に学習する「生物」の内容につながる問いかけを掲載し、さらに発展的な内容にも興味をもって取り組めるようにしました（学校教育法 第51条 第1号）。

〔該当箇所〕 前見返し、後見返し
- 「生物基礎」で学習する内容と身近な話題に関連づけた「コラム」や、「日常生活や社会との関連」などを設け、生徒が学習内容と日常生活とのつながりを実感できるよう配慮しました（学校教育法 第51条 第2号）。

〔該当箇所〕 コラム：p. 40, 51, 57, 58, 72, 95, 106, 123, 131, 137, 157, 180, 203, 214, 218, 221
 　　日常生活や社会との関連：p. 65, 111, 161, 223
- 巻末の「生物基礎で理解しておきたい重要用語」では、重要用語を英語でも表記し、一般的な教養を高め、専門的な知識を習得できるように配慮しました（学校教育法 第51条 第2号）。

〔該当箇所〕 p. 234～248
- 各章の最後には「チャレンジ！」を設け、身近な生物や生徒自身のからだの反応、自然環境や社会問題などについて、学習した内容をもとに自分の考えを述べたり話し合わせたりする活動を盛りこみました。主体的・対話的に取り組むことで理解を深め、社会の発展に寄与する態度を養うことができるよう配慮しました（学校教育法 第51条 第3号）。

〔該当箇所〕 p. 65, 111, 161, 223

編修趣意書

(学習指導要領との対照表、配当授業時数表)

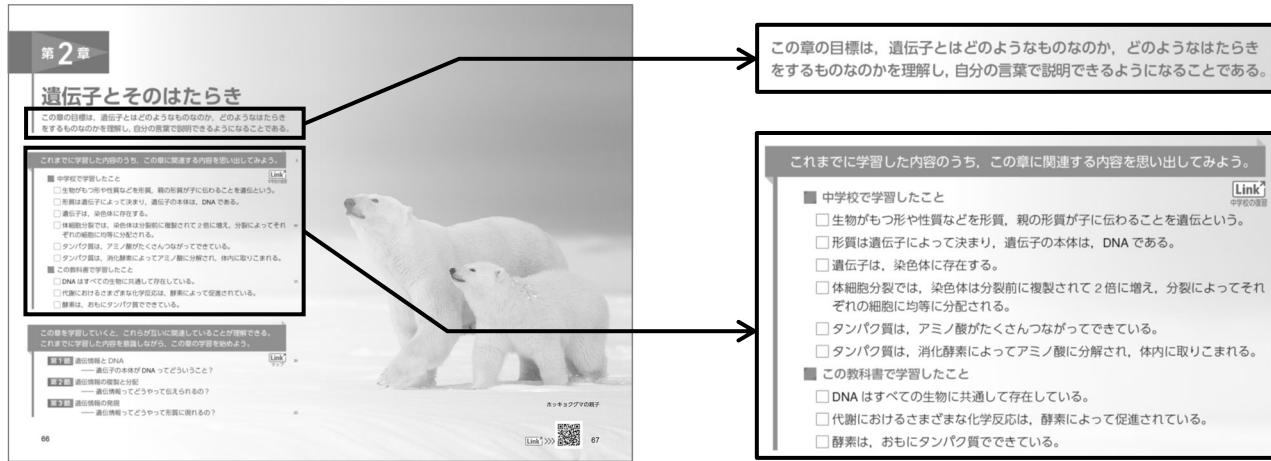
※受理番号	学校	教科	種目	学年
106-74	高等学校	理科	生物基礎	
※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※教科書名		
104 数研	生基 104-901	改訂版 生物基礎		

1. 編修上特に意を用いた点や特色

I. 教科書の特色

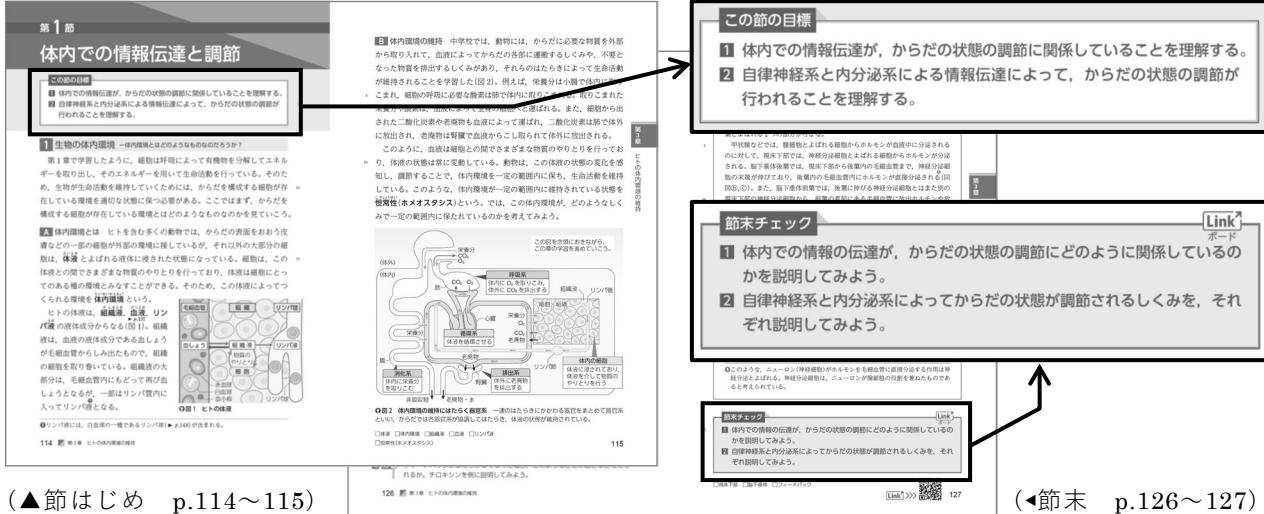
◎生徒が「目標」を意識し、見通しをもって学習できる

- ・章はじめには、**その章で学習することの目標**を示し、生徒が見通しをもって学習できるようにしています。また、既習事項のうち、その章で学習することと関連している内容を簡潔に記し、生徒がすでに**学習している知識を活用**して学習を進められるよう配慮しました。



(▲章はじめ p.66~67)

- ・各節のはじめにも、生徒が見通しをもって学習できるように「**この節の目標**」を示しました。また、節の最後には、目標に対応した「**節末チェック**」を設けました。「節末チェック」に取り組み、学習した内容を振り返ることで、生徒が自分自身で学習内容の理解度をチェックすることができるようになりました。



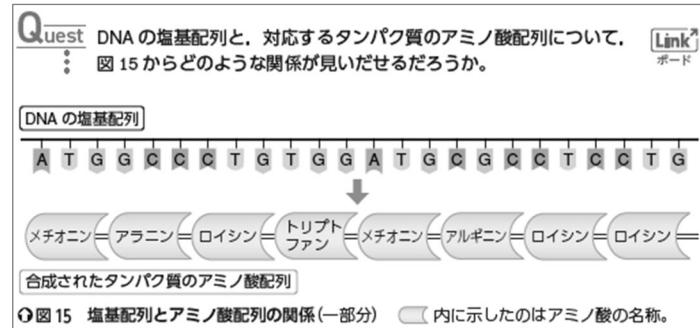
(▲節はじめ p.114~115)

(◀節末 p.126~127)

◎科学的に考え、探究する力を養える

- 学習にあたって生徒に考えさせたい内容に、「Quest」を設けました。資料などをもとに、まず生徒自身が考えることで、自ら見いだそうとする力や思考力を養えるよう配慮しました。

(►Quest p.90)



- 生徒が物事を科学的に探究するための技能を身につけ、理科の見方・考え方を養えるよう配慮し、以下のような構成要素を設けました。

巻頭「探究のプロセス」 p.10~15

生徒が自ら疑問をもって探究し、結果をまとめ、発表するまでのプロセスをまとめました。

巻末「Zoom 探究」 p.224~233

身近なものから探究のテーマとなる疑問を見つける方法や、データをまとめる際に必要となるグラフの作成・読み取り方法、探究のプロセスに沿って行った探究の実践例を取り上げました。

(►Zoom探究① テーマを見つける p.224)

Zoom探究① テーマを見つける

生物に関する探究を行う際は、さまざまな学習機会をとらえて、たくさんの生物と出会い、生命現象を直接観察することが大切である。生物は多数の要素からなる複雑な存在なので、生物を自分なりのこだわりをもって正確に観察すれば、さまざまなものなぜ?」「どうして?」という疑問がわいてくる。このような疑問が、「知りたい」「調べたい」という探究の動機になり、探究のテーマにつながっていくのである。

生物を観察する際は、次のような点を意識してみると、探究のテーマにつながる疑問が生まれやすくなるだろう。

■五感を駆使して観察する

生物を観察する際は、何となる眺めるのではなく、「五感」(視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚)を駆使していろいろな視点から注意深く観察しよう。

- 視覚 数、種類、大きさ、形状・構造、色・模様、反応・行動
- 聴覚 音、鳴き声
- 觸覚 感触、強度、重さ、力の大きさ、温度
- 味覚・嗅覚 味、におい

■観察する際の条件を意識する

同じ生物を観察する場合でも、「時間・場所・環境」などの条件によって結果が変わることがある。どのような条件で観察するか、観察したかを意識しよう。

- 時間 時間帯(朝、昼、夜)、季節(春、夏、秋、冬)
- 場所 緯度、経度、標高、地形
- 環境 気温、降水量、天候、明るさ、星の長さ、風速、植生、土壌(水分の量、腐葉の量、色、やわらかさ、粒の大きさ)、水(水質、水温、水深、流速)

- 上記の構成要素以外に、教科書中の「実験」・「観察」・「調査」・「実習」においても、さらなる探究的な活動ができるよう、必要に応じて「探究」として課題を設定しています。観察、実験などを通して、思考力、判断力、表現力等を養えるよう配慮しました。

- 章末の「チャレンジ！－探究する力を身につけよう－」では、探究のプロセスを部分的に行うことができる課題を設定し、科学的に探究する力を養えるよう配慮しました。



チャレンジ！－探究する力を身につけよう－

Link ボード

A 本州中部のある場所で、標高 500 m に位置する 500 ha の山林の樹木をすべて伐採して更地にし、50 年間にわたってそのようすを観察することにした。時間の経過とともに、更地にどのような変化が起こるか予想してみよう。
(探究のプロセス：考察・推論)

B スリランカに生息するアジアゾウは、かつて乱獲により激減したが、保護活動によって近年ではその数が回復してきた。その一方で、現地では昔からゾウは神聖な動物とされており、餌づけが行われている。そのためゾウが餌を求めて民家に接近して食料を奪うケースが増えており、人間との接触事故につながることが危惧されている。このようなとき、自然保護の側面と文化を守る側面との間で、私たちはどのように自然と折り合いをつけていくべきなのだろうか。自分の考えを述べ、話あってみよう。
(探究のプロセス：情報の収集、考察・推論、知識の統合、実社会への提案)

(▲チャレンジ！ p.223)

実験③ 運動によるからだの状態の変化

【目的】運動前と運動後のからだの状態の変化を調べて、なぜそのような変化が起こるのかを考える。

【準備】ストップウォッチ(または秒数をはかることができる時計)、階段 1段程度の踏み台、記録用紙

【方法】① 2人1組となり、1人は運動者、もう1人は記録者となる。
② 運動者は、手首などの脈がとれる場所を探して、安静時の脈拍数を30秒間かる。記録者は時間はかり、脈拍数を記録する(図I)。
③ 運動者は3分間、踏み台の昇り降り運動を行う(図II)。
④ 運動直後に、②と同様に脈拍数をはかり、記録する。運動後から1分後、2分後、3分後、4分後、5分後にも、②と同様に脈拍数をはかり、表に記録する。

【結果】測定した結果は、次のようになった。

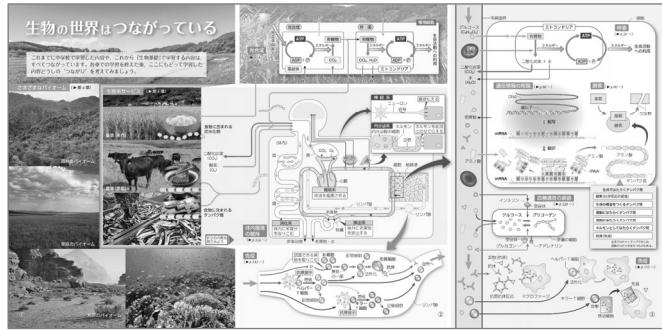
	安静時	運動直後	1分後	2分後	3分後	4分後	5分後
脈拍数(回)							
【考察】	① 運動中はからだのどこを動かしていたんだろうか。						
② 運動前と運動後で脈拍数が変化したのは、からだのどこが変化したからだろうか。また、そのような変化が起ったのはなぜだろうか。							
【探究】	脈拍数以外に、運動前と運動後でからだの中で変化のある場所を探して、どのように変化するかを調べてみよう。また、その変化が起った理由を考えてみよう。						
①手首のほかに、首の動脈などでも脈をとることができる。							

(▲実験 p.117)

◎学習した知識を活用して考え、より深く理解できる

- 前見返しでは、生物基礎で学習する内容がどのように関連しているのかを示すとともに、生態系から細胞・分子まで、マクロな視点からミクロな視点までのつながりを示すことで、学習内容の理解を深められるよう工夫しました。

(►学習内容の関連を示した図 前見返し)



- 各章の最後には、学習内容の振り返りができる「**知識の確認**」や「**補充問題**」、学習したことが日常生活や社会と関連していることに気づかせる「**日常生活や社会との関連**」を設け、生徒が学習して身につけた知識を活用したり、物事を科学的に考えたりできるよう工夫しました。

(►知識の確認 p.110)

- 本文中には、教科書に書かれていることをふまえて考えさせる「**問**」を設けました。取り組むことで、学習したことについて理解を深め、考える力を養えるよう配慮しました。

(▲問 p.126)

知識の確認

■第1節 遺伝情報とDNA

- DNA(デオキシリボ核酸)は、2本のヌクレオチド鎖からなり、二重らせん構造をしている。
- ヌクレオチド鎖は、リン酸、糖、塩基からなるヌクレオチドが多数結合してできている。
- DNAを構成するヌクレオチドの糖は、デオキシリボースである。
- DNAを構成するヌクレオチドの塩基には、アデニン(A), チミン(T), グアニン(G), シトシン(C)の4種類がある。
- DNAの塩基は、AとT, GとCという決まった組み合わせで相補的に結合する。
- 遺伝情報は、DNAの塩基配列に存在する。

参考問① フィードパックがはたらかなくなった場合、どのようなことが起こると考えられるか。チロキシンを例に説明してみよう。

(▲問 p.126)

- 卷末には「**生物基礎で理解しておきたい重要用語**」を設けました(p.234~248)。各分野で学習する主要な概念を理解するうえで重要な用語を、用語どうし関連づけて示し、主要な概念の理解が深まるよう工夫しました。また、各用語の英語表記も掲載し、学習内容を深める一助になるようにしています。

- 本文で重要用語が出てくる見開きでは、右下にチェック欄を設け、重要用語を確認しながら学習を進められるような構成にしました。

■「植生と遷移」、「植生の分布とバイオーム」の理解に必要な重要用語

<input type="checkbox"/> 植生 vegetation	ある一定の地域に生育している植物全体のこと。 ▶p.164
<input type="checkbox"/> 優占種 dominant species	植生を構成する植物のうち、地表面を広くおおうなど量的に割合の高い種。 ▶p.165
<input type="checkbox"/> 相貌 physiognomy	植生全体の外観。植生は相貌によって、森林、草原、荒原などに大きく分けられる。 ▶p.164
<input type="checkbox"/> 森林 forest	樹木が優占する植生。年間の降水量が多い地域に見られる。 ▶p.166
<input type="checkbox"/> 林冠 canopy	森林の最上部を林冠といい、地面に近いところを林床といいう。林内に届く光の量は、林冠から林床に向かうにつれて少なくなっていく。 ▶p.166
<input type="checkbox"/> 林床 forest floor	

(▲生物基礎で理解しておきたい重要用語 p.244)

◎生物や生物現象への興味・関心をもつことができる

- 本文では、学習内容に関連した身近な生物の話題を取り上げた「**コラム**」、科学者による研究の足跡を紹介した「**探究の歴史**」などを設け、卷末には教科書中に出てくる生物を写真とともに紹介した「**生物図鑑**」を設けました。生徒が生物学に興味をもちながら学習できるよう配慮しました。

(►コラム p.180)

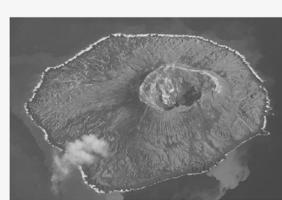
コラム

噴火によって生まれかわった西之島

Link [Webサイト](#)

西之島は、小笠原諸島にある無人島である。2013年に西之島の近くで海底火山の噴火が起り、海上に新島が誕生した。新島はその後も噴火をくり返して面積を広げ、西之島を飲みこむかたちで一体化し、ひとつの島となった。

西之島は、最も近い島(父島)から約130km離れており、孤立した位置にあらため、生物が移入しにくい。つまり、噴火によって植生が破壊された西之島



●図I 西之島の外観(2023年12月)

◎その他の工夫

- ・**デジタルコンテンツ**として、学習内容に関連した実験映像や図版解説アニメーション、参考資料、活動を行うためのツール、生物の3Dモデルなど、生徒の理解を助けるコンテンツ、興味を広げるコンテンツ、学びを深められるコンテンツを豊富に用意しました。該当箇所に示した「Link」アイコンを目印として、各見開きにある二次元コードから容易にアクセスできるようにし、生徒が主体的に学習に取り組めるよう配慮しました。
- ・**用紙**は、丈夫で薄く軽いものを用い、生徒の日々の持ち運びに負担がかからないよう配慮しました。また、判型はA5判で、軽くてコンパクトな扱いやすい大きさです。
- ・図版の色使いには**カラーユニバーサルデザイン**に配慮するとともに、本文などの文字には見やすく読み間違えしにくい**ユニバーサルデザインフォント**を採用しました。
- ・重要用語は太ゴシック体にし、すべてにふりがなを振りました。
- ・文章は、高校生にわかりやすく読みやすい表現にするよう心がけました。



II. 教科書の構成

前見返し

I. 前付・序章

生物基礎を学ぶにあたって
探究のプロセス・予備学習

2. 本文

全体を4章で構成しました。本文中には以下の構成要素を設けました。

章はじめ	その章の学習の目標と、その章に関連する既習事項のまとめです。
この節の目標	その節の学習のゴール（目標）を示しています。
Quest	本文の学習に入る前に、まず生徒に考えてもらいたい問いただしです。
実験 観察 調査 実習	学習した内容を具体的に確かめたり、それと関連した生物現象を考えたりするための実験や観察です。
節末チェック	「この節の目標」が達成できたかどうかを確認する問いただしです。
参考	本文をより深く理解するための補足的な内容を扱っています。
発展	「生物基礎」の学習指導要領には示されていない内容ですが、興味・関心に応じて学習することができる内容です。
コラム -進化の視点-	本文の内容に関連した身近な話題を扱ったものです。進化に関する内容のコラムには、アイコンに「進化の視点」と記しています。
探究の歴史	生物学の発展に重要な役割を果たした探究を紹介しています。
問①	学習の理解度をはかる問いただしです。
思考学習	生物学的な思考力を養うことができる考察問題です。
考えてみよう！	学習した内容をふまえて生徒に考えてみてほしいことを取り上げています。

3. 章末

知識の確認 補充問題 チャレンジ！ 日常生活や社会との関連

4. 卷末資料

Zoom 探究
生物基礎で理解しておきたい重要用語
生物図鑑

5. 卷末付録

DNA模型の型紙

後見返し

2. 対照表

図書の構成・内容	学習指導要領の内容	該当箇所	配当時数
生物基礎を学ぶにあたって 探究のプロセス 予備学習①顕微鏡観察の基本操作 ②ミクロメーターによる測定	(1) 生物の特徴 (2) ヒトの体の調節 (3) 生物の多様性と生態系 の探究に関する内容	p.8~25	3
第1章 生物の特徴	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴	p.26~65	
第1節 生物の多様性と共通性	⑦ 生物の共通性と多様性	p.28~43	4
第2節 エネルギーと代謝	① 生物とエネルギー	p.44~49	2
第3節 呼吸と光合成		p.50~63	4
第2章 遺伝子とそのはたらき	(イ) 遺伝子とその働き	p.66~111	
第1節 遺伝情報とDNA	⑦ 遺伝情報とDNA	p.68~77	4
第2節 遺伝情報の複製と分配		p.78~85	4
第3節 遺伝情報の発現	① 遺伝情報とタンパク質の合成	p.86~109	6
第3章 ヒトの体内環境の維持	(2) ヒトの体の調節	p.112~161	
第1節 体内での情報伝達と調節	(ア) 神経系と内分泌系による調節 ⑦ 情報の伝達	p.114~127	6
第2節 体内環境の維持のしくみ	(ア) 神経系と内分泌系による調節 ① 体内環境の維持の仕組み	p.128~141	6
第3節 免疫のはたらき	(イ) 免疫 ⑦ 免疫の働き	p.142~159	6
第4章 生物の多様性と生態系	(3) 生物の多様性と生態系	p.162~223	
第1節 植生と遷移	(ア) 植生と遷移	p.164~180	5
第2節 植生の分布とバイオーム	⑦ 植生と遷移	p.181~193	5
第3節 生態系と生物の多様性	(イ) 生態系とその保全 ⑦ 生態系と生物の多様性	p.194~205	5
第4節 生態系のバランスと保全	(イ) 生態系とその保全 ① 生態系のバランスと保全	p.206~221	5
Zoom探究	(1) 生物の特徴 (2) ヒトの体の調節 (3) 生物の多様性と生態系 の探究に関する内容	p.224~233	5
		計	70

編 修 趣 意 書

(発展的な学習内容の記述)

※受理番号	学校	教科	種目	学年
106-74	高等学校	理科	生物基礎	
※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※教科書名		
104 数研	生基 104-901	改訂版 生物基礎		

ページ	記述	類型	関連する学習指導要領の内容や内容の取扱いに示す事項	ページ数
32-33	系統樹は何をもとにつくられるのだろう？	1	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴 ⑦ 生物の共通性と多様性 「生物は進化の過程で共通性を保ちながら多様化してきたことを扱うこと。」に関連。	0.5
42	真核細胞を電子顕微鏡で見てみよう	1	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴 ⑦ 生物の共通性と多様性	1
52	呼吸によって生じる ATP	1	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴	0.25
53	呼吸の過程を詳しく見てみよう	1	① 生物とエネルギー 「呼吸と光合成の概要を扱うこと。」に関連。	1
55	光合成の過程を詳しく見てみよう	1	「呼吸と光合成の概要を扱うこと。」に関連。	1
57	すべての生物が呼吸をしているのだろうか？	1	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴 ⑦ 生物とエネルギー	1
58	真核細胞はどのようにして誕生したのだろうか？	1	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴 ⑦ 生物の共通性と多様性	1
60	カタラーゼのはたらきと過酸化水素	2	(1) 生物の特徴 (ア) 生物の特徴	0.25
61	基質特異性と活性部位	1	① 生物とエネルギー	0.25
62	酵素はどんな環境でも同じようにはたらくのか？	1	「酵素の触媒作用や基質特異性、ATPの役割にも触れること。」に関連。	0.75
71	塩基の結合に相補性があるのはなぜ？	1	(1) 生物の特徴 (イ) 遺伝子とその働き ⑦ 遺伝情報とDNA	0.5
78	染色体と DNA	1	⑦ 遺伝情報とDNA	0.25
80	DNA ポリメラーゼ	1	(1) 生物の特徴 (イ) 遺伝子とその働き ⑦ 遺伝情報とDNA 「DNAの複製の概要を扱うこと。」に関連。	0.25
85	細胞周期に異常が生じると何が起こるのだろうか？	1	(1) 生物の特徴 (イ) 遺伝子とその働き ⑦ 遺伝情報とDNA 「細胞周期とDNAの二重らせん構造についても触れること。」に関連。	0.75

88-89	タンパク質の構造	1	(1) 生物の特徴 ① 遺伝子とその働き ② 遺伝情報とタンパク質の合成	2
97	遺伝情報が変化すると何が起こるのだろうか？	1	(1) 生物の特徴 ① 遺伝子とその働き ② 遺伝情報とタンパク質の合成	1
98-99	タンパク質合成のしくみを詳しく見てみよう	1	(1) 生物の特徴 ① 遺伝子とその働き ② 遺伝情報とタンパク質の合成 「転写と翻訳の概要を扱うこと。」に関連。	2
101	細胞はどのようなしくみで分化する？	1	(1) 生物の特徴 ① 遺伝子とその働き ② 遺伝情報とタンパク質の合成	0.75
102-103	分化した細胞は同じ遺伝情報をもつのか？	1	「全ての遺伝子が常に発現しているわけではないことにも触れること。」に関連。	2
105	遺伝子の発現を調節する領域	1	(1) 生物の特徴 ① 遺伝子とその働き ② 遺伝情報とタンパク質の合成	0.25
106	DNA から進化がわかる	1		0.75
107	DNA 型鑑定とは？	1	① 遺伝情報とタンパク質の合成	1
108	個人に応じた医療を目指して～個別化医療～	2	「遺伝子とゲノムとの関係にも触れるこ と。」に関連。	0.5
120	神経伝達物質	1	(2) ヒトの体の調節 ① 神経系と内分泌系による調節 ⑦ 情報の伝達	0.25
125	水溶性ホルモンと脂溶性ホルモ ン	1	「体内環境の変化に応じた体の調節に 神経系と内分泌系が関わっているこ とを取り上げること。」に関連。	0.25
136	血液凝固のしくみ	2	(2) ヒトの体の調節 ① 神経系と内分泌系による調節 ② 体内環境の維持の仕組み 「血液凝固にも触れること。」に関連。	0.25
146	トル様受容体	1	(2) ヒトの体の調節	0.25
147	炎症はどのようなしくみで起こ るのか？	1	① 免疫 ⑦ 免疫の働き	1
148	リンパ球の受容体	1		0.25
149	自己と非自己はどのように識別 されるのか？	1		0.5
153	抗体はどのような構造をしてい るのか？	1		0.5
157	花粉症はどのようなしくみで起 こるのか？	2	(2) ヒトの体の調節 ① 免疫 ⑦ 免疫の働き 「身近な疾患の例にも触れること。」に 関連。	0.5
172-173	先駆植物の窒素利用	1	(3) 生物の多様性と生態系 ① 植生と遷移 ⑦ 植生と遷移	0.25
199	生物多様性－「生物が多様であ る」とは？	1	(3) 生物の多様性と生態系 ① 生態系とその保全	1
201	生産力ピラミッド	1	⑦ 生態系と生物の多様性	0.25
合 計				24.25

(「類型」欄の分類について)

- 1 …学習指導要領上、隣接した後の学年等の学習内容（隣接した学年等以外の学習内容であっても、当該学年等の学習内容と直接的な系統性があるものを含む）とされている内容
- 2 …学習指導要領上、どの学年等でも扱うこととされていない内容